

恩師 林 長蔵先生の軌跡を偲んで

神戸常盤大学客員教授 片山 善章

私が林 長蔵先生に出会ったのは、正式には昭和42年（1967年）4月1日に大阪大学医学部付属病院中央臨床検査部（阪大病院中検）に入職した時でした。「正式には」と表現したのは阪大病院中検に入職する前にお会いさせていただいたからです。私が大学4回生の学生時代に大阪市内のある病院における自主実習で臨床検査、特に臨床化学（当時は化学検査と称していました）に出くわし、病院臨床検査科（部）に就職するのだったら阪大病院中検に林 長蔵（当時は国立大阪病院研究検査科に在籍されていました）先生が昭和41年（1966年）10月に着任されるから、阪大病院中検の林先生の指導を受けた方がよいとアドバイスを受けて、林先生をお訪ねするのが最初でした。

阪大病院中検入職後は「林先生は阪大病院中検を名実ともに評価の高い検査部にしたい」との思いを、「ローマは一日にして成らず」の熱意をもって語られていました。また、研究や検討については林先生の指導で深夜3時ごろまで実験したことが多くあったが、林先生も実験結果が出るまで中検部員室に残っておられること多くありました。また、個人的には「飲み」につれて行っていたことも多く、私が血気盛んな23歳ぐらいから32歳ぐらいまでは公私ともに厳しいご指導を受けました。

私は林先生のご指導を受けたスタッフ（林 門人）が育っていった阪大病院中検の一番いい時代に在籍しましたが、昭和51年（1976年）4月に、当時、文部省の1県1医学部、医科大学の新設構想で愛媛大学医学部付属病院中央検査部（愛大病院中検）技師長として出向を命ぜられました。「自分の城を築いてこい！」が送り出されたお言葉でした。その当時は林 門人の方々も他施設に技師長で移っていく時代でした。

昭和57年（1982年）3月に当時の国立循環器病センター臨床検査部（国循センター臨検）に転任することが決まり、林先生に愛媛に来ていただき、創設から7年間在籍しました愛大病院中検を案内させていただきました折に、滅多に褒めることをされない林 長蔵先生がここまでよく頑張った検査部を創設したと言ってくださいました。恩師林先生はやっと何とか私が一人前に育ったと思われたのかなと思いました。

林 人事で阪大病院中検から愛大病院検査部、国循センター臨検と出向・転任の過程で「仕事、研究、教育に関して、事の大小にかかわらず真剣に取り組むことが大切であることを林先生から無言のうちに教えられていたと思います。

一方、林先生の大きな実績は精度管理の一環として、日本臨床化学会（臨床化学分析部会）近畿支部で実験・検討し始めた酵素活性測定標準法確立や大阪府医師会臨床検査精度管理調査における酵素標準物質調製に関する研究は、酵素活性測定値の施設間誤差を解消する基本的な考え方を提唱されて、林先生に繋がっている方々の実験・検討が起点となって、全国的に実学研究として拡がっ

ていったことは明記すべき軌跡であると思います。

また、昭和53年（1978年）に雑誌「生物試料分析」を発刊と講習会・講演会開催など行う生物試料分析研究会（代表：林 長蔵先生）を設立された。当時、「臨床化学」発行の事務局は阪大病院中検にあり、雑誌「臨床化学」の経済的支援として姉妹誌「生物試料分析」を発行するとお聞きしたことがある。その後、林 先生は「臨床検査領域の実学的な研究を発表議論する場として学会を設立する」という意向で「生物試料分析研究会」を発展的に改組して「生物試料分析科学会（The Society of Analytical Bio-Science）」が平成1年（1989年）に創立された。本年（2015年）2月14、15日には下村弘治（文京学院大学大学院保健医療科学研究科）集会長のもとで第25回生物試料分析科学会年次学術集会在開催される。林 先生の「先見の明」が実を結び、これからも発展していく事を願っておられると思います。

以下記述は公的なことではありませんがエピソードを紹介いたします。

その1：林 先生退官記念誌

先生が阪大病院中検をご退官2、3年前に集大成として、臨床化学析に関する参考書を作りたいと言われていました。その記述形式は「日本薬局方」に準じた形式、すなわち収載医薬品について日本国内で繁用されている医薬品の規格基準書（注釈が多く記述されている）を参考にした形式である。林 先生に繋がる50数名の臨床検査技師によって執筆された。題名は「臨床化学分析の原理と実施法」林 長蔵監修（A4サイズ690頁）が林 先生退官記念誌として1995年（平成7年）に発行（非

臨床化学分析の 原理と実施法

監修 林 長蔵

編集担当者住所・電話

小笠原 正樹	市立岡崎病院	〒444 岡崎市若宮町2-2 TEL (0564)22-8111
小川 善資	北里大学衛生学部	〒228 相模原市北里1-15-1 TEL (0427)78-8071
片山 善章	国立循環器病センター	〒565 吹田市藤白台5丁目7-1 TEL (06) 833-5012
久原 巻彦	大阪府立公衆衛生専門学校	〒558 大阪市住吉区大領町 3丁目2-49 TEL (06) 693-6001
藤田 誠一	国立循環器病センター	〒565 吹田市藤白台5丁目7-1 TEL (06) 833-5012
舟木 正明	国立京都病院	〒644 和歌山県日高郡 美浜町大字和田1138 TEL (0738)22-3256
古川 一郎	箕面市立病院	〒562 箕面市萱野5丁目7-1 TEL (0727)28-2001

臨床化学分析の原理と実施法

1995年4月1日 第1刷発行 非売品

監修 林 長蔵
編集 林 長蔵助教退官記念誌刊行会
発行者
印刷所 サンエース株式会社
京都市山科区竹鼻町8-20
TEL (075) 595-0111(代)

売品)された(表紙と扉に記載されている編集者を下記に示します)。

その2:「臨床化学つどい」

また、林 長蔵 先生(平成26年11月7日ご逝去、元大阪大学医学部附属病院中央臨床検査部助教授)、稲生富三 先生(平成21年9月23日ご逝去、元社会保険中京病院検査部技師長)が幹事で名古屋・大阪の臨床化学を活発化することを目的として、検査部におけるホットな話題を討論する場と学会には発表できない研究途中のデーターの発表する場として「臨床化学合同ゼミナール」を発足し主宰されました。第1回開催は昭和46年(1971年)でした。昭和50年(1975年)に「臨床化学のつどい」改称されて平成13年(2001年)まで50回開催が続きました。

「臨床化学つどい」の歩みから下記のことを抜粋して記述します。林先生の学問に対する真骨頂のお考えであると思います(原文そのまま)。

臨床化学のつどい 林先生の直筆です。

頂上を極める道はいくつかある。登る手だてもいくつかある。真理を極めることは、深く掘り下げるといふ言葉で表現されることが多いが、上がることも下げることも、一様に通じることである。

この「臨床化学のつどい」は、ただ数分間の画一的な学会発表で、発表したことだけが記録に残り業績の一つになるようなことでなく、ひざをつき合わせて聞き、思考し、尋ね、訊ねる研究会にしたいという発想から生まれたものである。

自分との研究テーマとは異なっているけれども、極めるということは同じだし、その手だても相通じるものがある。

発想の妙も、行きつまりの打開も、その中に得られることが多くあるだろう。

「つどい」といふ言葉は、そのロマンを求めたものである。

この会は、ルーツをたどると昭和45年に「臨床化学合同ゼミナール」として発足し、「つどい」として再発足したのが、昭和50年12月6日であった。

かれこれ10年を経ているが、永きだけが歴史ではないことを知る時にあるような気がする。

「初心忘るべからず」の言葉を吾人ともどもに肝に銘じなくてはならない一里塚であろう。世代の交代など、壮、若の人々にあってはならないことであろうと思う。

この「つどい」の中から、たくましい研究者が輩出していくことを信じている。

昭和61年5月

幹事長 林 長蔵 大阪大学病院

その3: 林先生同門会「野郎会」

さらに、林先生同門会としましては先生がご健在の頃は毎年「野郎会」と称して、時には一泊で

遠方に出かけたりすることが多くありました。参加者数は他施設参加者も含めて50数名を数えることもあり、林先生のご指導を受けた方がいかに多かったかを物語っているエピソードも多くありました（1988年晩秋、京都貴船から鞍馬に抜ける道すがらのスナップ写真を下記に示します）。



阪大病院中検退官後は済生会中津病院顧問でご在籍されて、平成10年（1998年）に退職されてからは、お体の調子が芳しくなく臥せられることが多くなり一線から退かれました。

昨年、平成26年（2014年）11月7日に享年89歳でご逝去されたとの訃報のお知らせが奥様からありました。驚きと悲しみと「巨星おちる」の感で寂しさが一杯で暫らく放心状態でした。

私が今あるのは恩師林 長蔵先生との出会いがあったからと深く感謝申し上げまして筆をおきます。

公私ともに長い間ご指導いただきありがとうございました。

林 長蔵先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

平成27年 1月26日

合掌